不知しく

十一

哥伐名ときつる

[v.14]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 14
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

19

源氏廿七ヶ海京次年廿八ヶ十二月まで云

さやうなえしし夢のうち院（源ん）のみかど（桐壺）の御
ことを心まかけ思ひなくいかでかれしづこと語らん
ひとしくひとてまつらんとをもんと思しなげき
けうをかくかへりなていそのれいそぎし語神無月
まはれ八諱（りう）し語よれ人なびさいうまいかな
ことむかしのやうなり（弘徽殿廿五）おほぎさ紀なれれたすやこ
をもくおりしますうちまもつねる此人（源）をえたらず
なるまぬかとおぼしかれば（朱雀ん）れ門と院（桐壺）のれ遺（ゆい）
云（ぞん）をおもひきこえし語もれくむひありぬべく
おぼしけうをなを（源と）しこそなひて此心ちすぐしく
なんおぼしけうをこそなるやまを語しれ見も

さまやぶ話ぬれど。大かたよりえなぐ何りまじ
う。心ぼそきことのこひさしかるぬことは何ぼし
つゝつゐまめし何りて。源氏の君ハ年りぬ。世中の
ことなどもへぶそなくのこまもをたまどし以て。
此ほいのやうなれば。何ほうこのよれ人もあいなく
うれしきことにこゝろこびきそしけり。朱雀ノ 何りぬなんの
此心づかひちかくなりぬるまも。勝月 なりしのこのころ
ぼそげまゝ。此ちひなげきぬへるいと哀に何ぼれ
なり。太大臣 朱雀河 おとゞうをぬふ大宮 恵和 もこれもしげなくのこ
なりぬへるに。我世の御りすくなきぬちすうになん。
いとくおしうあはれなきまそどまり給りんと

しらん。むかしより人にはせひかたしぬへれどこ
げからのうちざしのまゝちまさるひにぞれ
ことのこゝろん衣に見てけるこちまさる人又はい
ありてこゝまへどもどろかるしぬ心ざしもも
なずらはざらんとせきへこそ心ぐるしかれとてうち
なきなぬ女君(勝月)かほはいとあぎやかる(くイ)白ひてこぼる
げりのあいぎやうまて泪もこぼれぬるとよろづ(朱雀ん)の
つゝわまれて衣にらうしてとゆらんぎらるたまどり(羽)
こゝとぞにまゝまへるまじきくちあしうもあり
かれらざりしかき人のゝあには今こゝいで給てんと
あまふもくちあしやかざりあれどこゝひとまてぞ

ゑ給ふんりしなど。ゆくすゑのと後さへのこ海と
すりまゝ。いとゞ（勝月ん）もづしうもかなしうもおぼしこまふ。
れうちなどな夜めりしうきかしてかざりなき
心ざしのさし月まそふやうまてなさせなふ。
めでたき人（源）なれど。さしもさへらざりしかしき心
ざへなど。それさひきれなふまくまおどて我心の
けくいたけなきまゝまゝをて。さうさはざをさへひ
き出て。けぶなをばさしまもいたぶ人のれこゑんさへ
などおぼし出りまゝ。いとうきれ身なり。おろろ（源女八ヶ）しの
きさしざまゝ。去（冷泉）家のれがんぶくのことあり。十一ま
りまへど。ほどよりおほきなるおさなしうきこ

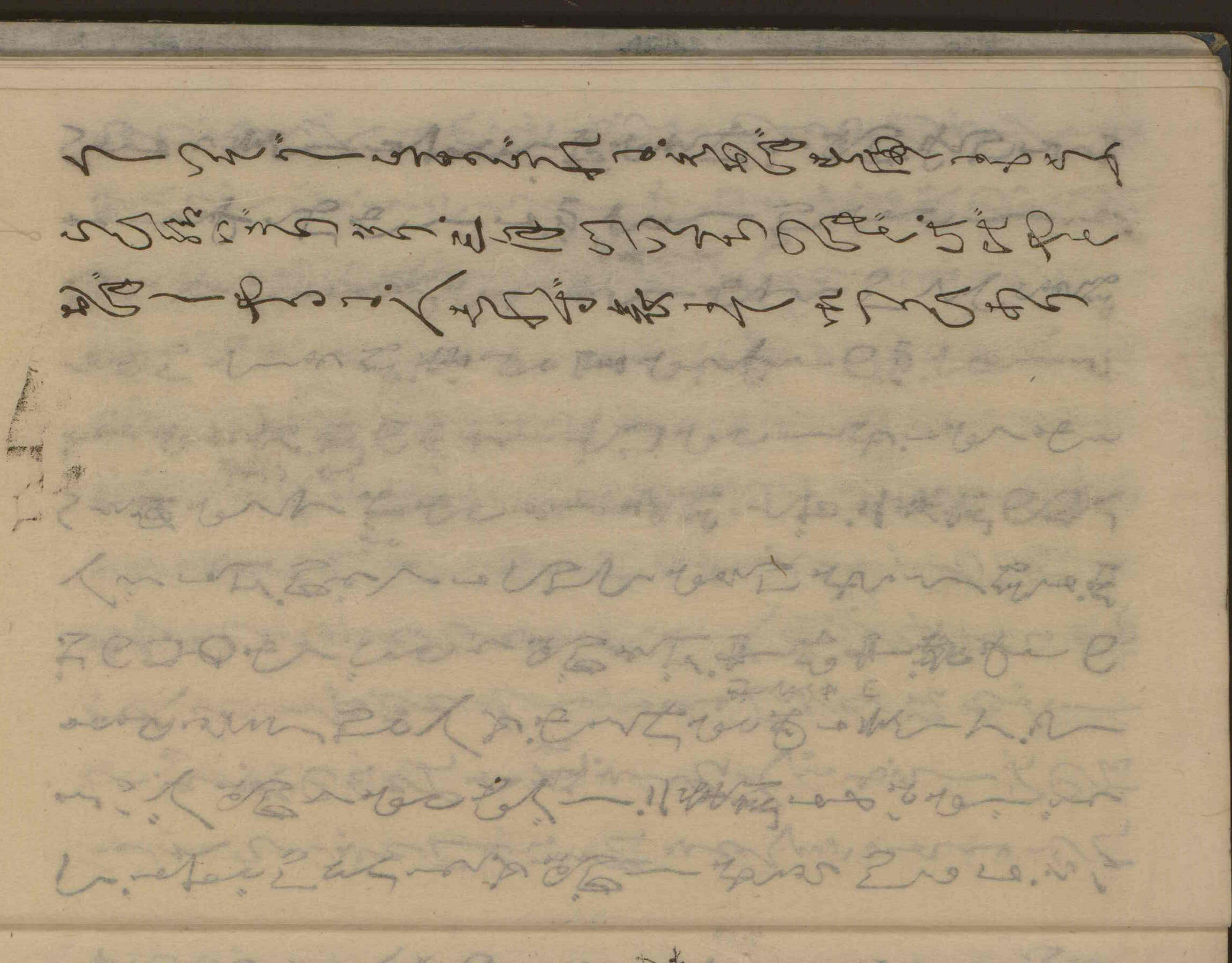
まてさぐ源氏の大納言のれかほをふくろまうけ
しさんやうまうし給いとまばゆきまでひかり
あひ見へるを世人めでたきものに字ゆれどぞ（放つか）
家はいらじうるはしいうきことにおひなくれ
心をつくし給うちにも（朱雀ん）めでたしとこそまつり
ゆひて世中ゆづり字もなべきことなどなつらう
きてしたしを給おなじ月の女よ日れくるゆづり
のことにもちかなれど（無病ん）おほぎさ紀おぼしあそそ
ぐきことに紙ぞなりとぞ字もなぐさめ給けり（ぞう地）坊にはぞ
（ぜう）（きやうでん）前香殿のこゝゐ母ぬ世中あらたまりてひきうへ

今めしきことぞおほかり。源氏の大納言関大臣(かいだいじん)に
ありぬぬ。数(かず)さぶまりてくろろぐ所もなりかれば。
くもゝつ給なりかり。やがてよれまつりどもとし
のべきなれど。さやうのことしげきそく(職)にかゝる人ず
なんとて。ちじ(左大臣)のおとゞ。せ門(摂政)しやうしのべきよし
ゆづり(源ノ)罪九なふや(左大臣詞)まひまよりてゝらねもへし
こそまつりてしをいよくかいのつまりそひてさか
しきことゝもべくじとうけひきし給ひず。人(地)のく
まともこうつり世中さぶましぬありはふるき
ゝ詔(あと)とこそしろ人ぶるもおきまれるよりはしろ
ともちじ寸いてつ人けるとして。海こせ云

ひだりにはしなれやまひにしびえてへし給
けるくらねを世中かたりて又あらしらめ給ふんに
さらにとがあるまじう御目やけつるくしさぶ見
らる。さるゝあしも御りなれば（たゞ名）せまひなて給ひで大政
大臣になりぬふ。此としも六十三にぞなり給。世中すき
ましきにより。かつはこゝもりぬ給しなどりへし
それやぞぬへば此こどもなど。しづむやうなり
御しぬへるを。これうひ給どりつきて（ひ）寧相中将。
権中納言になり給。此四君のれりしの姫君（こうきでん）十二に
なり給を。内にまゐらせんとしづき給。此ことごう
しひし君も（和様ノ太太后ニ）かうなりきとせて。いとなまふさ殿

なりたしらぐまれこどもいとあまるひぎくま
おひいでつゝまさもしげなりを源氏のおとゞハ
うしやこ給大夫げしのワタ君ハ人よりことまうつらし
まて内裏宮の夫ごとし給こひめ変君のうを給し
なげきを宮大宮おとゞ左右ハまるさしまわらゝあて見し
なげくされどおもしきぬ名所もたゞひ源おとゞのれひ
りまよろげもてなされまてとしごろ御し
まづこつゝなどりなきまでさる人給源ゐを昔ま此心
だへかしらず御りあしごとまワたり給などし
つゝ夕君のれめれと進さしぬ人ごもとし此の行
かりぞらしざりけりハこれさるべきことまふれ

つ。よすがいかんことをおぼしなさいけるに。さい
もいべおぼくなりぬべし。二条院にもおなじごと
まちきこえしけり人をおもれなり物に見えて。さし
ばのむすめあくづりとおぼきば。中将中務やうの
人ぐにはほどくにつけつゝなさけをこゝし給に。ほ
いと夜なくて和(かう)ありきも志給もず。二条院のひん
がしなり家(東院之)院(みん)のれ(こ)そうぶむなりしをよなくあら
ためいくしを給。菜ちり星などやうの心ぐるしき
ひとぐすまきんなぶ見しあてゝいくろつき給
まことやかれありしに心ぐるし(法産ノ事)げなりしこと。
いかにと見しまするに時なれど。おぼやけにる



くしいそがしきまぎれまえあげき雨くまもさふ
らひ給はざりけり。三月のいたちのほどけびやと
おぼしやるまに人もれず長まてれつひあり

十六

昭ノ位
さくかり来りて十六日にあるん女にてこゝろかるゝ事
し給とつげきこゝ也。めづらしきこゝ侍にてさへあか
ゐをおぼすまをろかなるしずなどて京にむかへて
かうことをもきさせざりけんとぞちかしうおぼ
さう。宿曜(すくえう)にみこゝ三人ミかどきさ紀かなしぬなら
びて生(ひま)れ給べし。中のをとり(タノ子)ハ太政大臣にてぐらゐを
きたむべしとかんがへしより。中のをとりがしに。
女ハいできぬべしとあるしことさしてゝ
なふなあり。おぼかたかたなきくらゐ人のぼり。
世をまつりごちぬべきことさゞりかしこうりし
あまたのきし人だのきてあつめたりハぞし此を

力七

せのつゞりさまぎれおぼしけらうつなぜらし
ずいのくゝねまゝるひのまぬとなぜおもひの
ごとうれしとおぼせどかずしいまでともれめぐる
（天徳まつきはりんるすハ源ノおかうまるとく）
まちいざゝるまあるまじきさくおぼせどおまさの
みこころのあまりまずくれてらうささあそこおぼし
（源と）
まうしかどかく人まおぼしとさそげつれこゝろを
（桐壺法門ノ）
（源ノ）
おもふまずくをとゝりゆりうちのくゝておもし
（冷泉）
ますをおのもゝまひとのさらまあまのどかさう人の
ふむあまりまずされ心のうちまおぼしそうゝま
りまのあまりまうしげまおぼすすまうしのり
（宮）
このさつゞへばまさゝまゐれひともおまあべてあられ

すくまそてびがくあさきやもせびあさき心を
つねにやありけんさりまでこうしこうとすゝむも
あるべき人のおやあさきをうらむまれなれば
いとおしくおぼゆげなくもおぼえなれこのみど
すぐしてびくへてんと思ひしてびんぎの院
いまだいらずべきもいましまし思ひを給ひさる奈
よきがくあき人もありがたうんを覚えて院に
さぶらひしもんじのむしめ安居院の宰相ねまで
あくありし人のこありしせしもかどもうちせて
みすゝあるを世にんけりつがちなるを後まで子う
らそりとなうしめしつけなるをさきあるうけりて

力八

とのついでにまゐびまゐてけり人めして。さう
ぞさ殿にの給ちぞろ。まぐ（宣育ノ女ム）けくてなる心もなき
人まで。おけられ人もしれぬあづしやにちがむる心
ぼそさなれば。ふうもせひこどしぞ。此れあたりの
こと代ひと人にめでこうせひきてまいるべき（明石姫宮ノ乳母ニ）
よし中さをたり。いと（源ム）あれにかくしぬぼして。
いぐしこそ給。地のついでにいらじうせびまぎれて
おりしまいたり。さは（乳母ム）四九ちがしいかにをまし
ゑえぐれけるをいとうじけなきによろづ母もひ
なぐさめて。こぐのこまはをんまゐ四の母。よろ
しき日なりなれば。いそ（源）がしこそまて。おや（詞）もう

ちひやまなきやうなれど、おまふさ海ことなること
まてなん。身づくしもおぼしぬすまねにむすぼれ
たりしこゝろしをちひよそへて志げしいゆんじ
ゆへなどことの有さ海くらしうかたしひ給う人（乳母）
の家づくへとさぐをしりバ。（ほ）こ給ありもありしを。
いたりおとろへにより。亂のさ海もいひしぞあれ
まどひて。さすがにおぼきなるところのそぐちなど
うとましげに。いそぞをぐしつんとこゝ。人ざ海
けやかにおしられバ。ぬんじられたれどと
くこゝろ。これのまて。とりかへしけべきこゝち
こそされ。いかにとの給ふつけてもゞ（乳母ム）なるじうハ

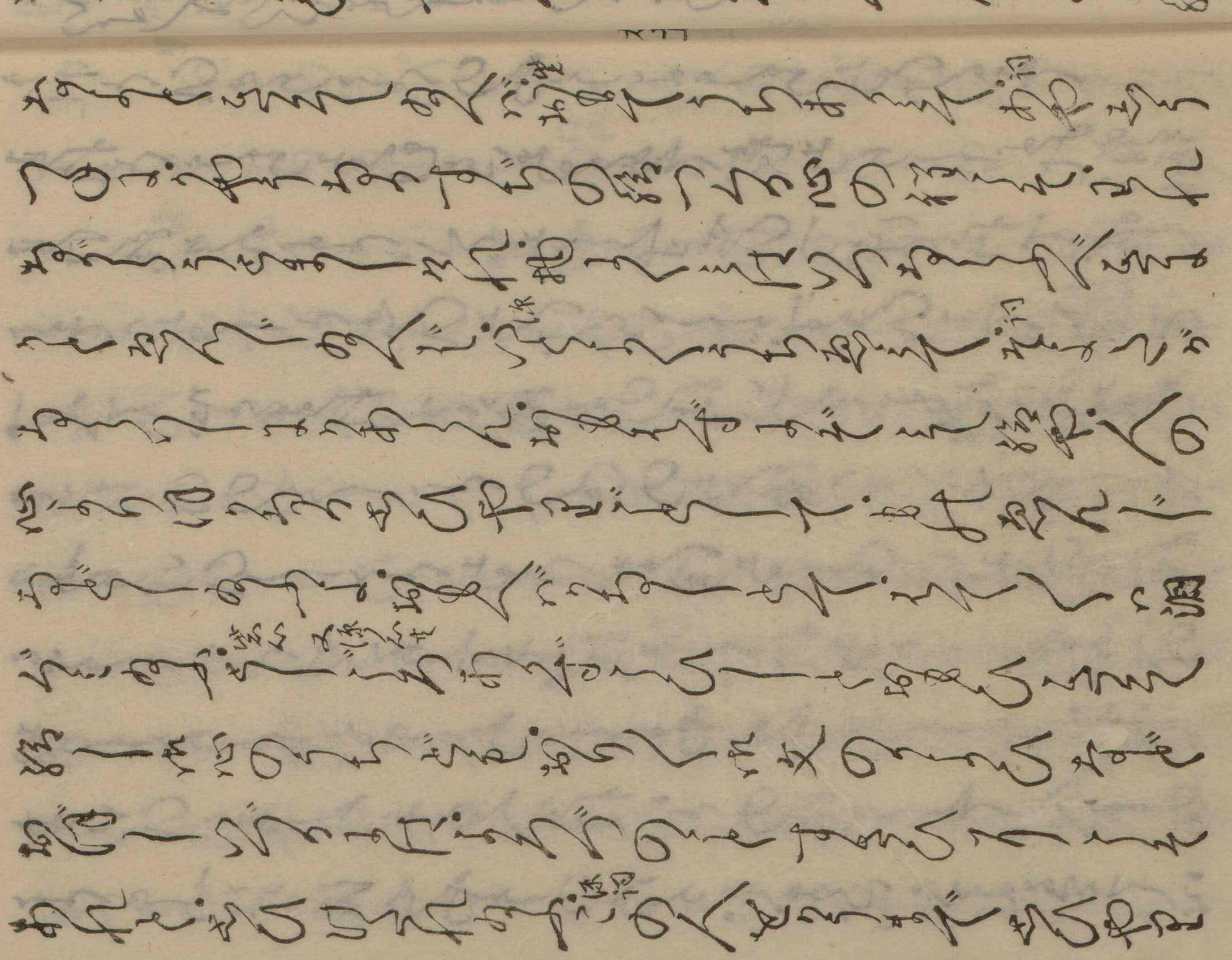
れ身ちくもつうまつりなれば、うさ身もなぐ
さんちまましとそてまつり
源 りてよりへぐそぬ中とあらり○ど剛(ほん)も
おしき抱まぞありけり。しろひやをまじとの給へば、
乳母 うちひて
乳母 うちつけのけれをおしむ、ぐどまてしもむ
りくましろひやいをぬなれてきゆりを源心いてと
おぼせ。乳母 車までぞ京のほどいゆきとなれけり。いと
しろしきひとさしそへて。ゆめもすまじくもち
ぐるめのてつかす。れ太刀しさるべきもれなど。取
をきまぞ見しやゝぬ人面なし。めれとまもあり

がうしこ海やかなりれいこそりの時どあさりしぞ。
入(吟ノ)るさひりしづきさしふしんありさ海おもひやなも
ほくゑまれ給ことあほくまゝ衣に心ぐるしくも。
さゞ此ことの此心なりなもあさりしぬにこそし。
此ふこまもをろかにまてなしさふまじと。返て
いましめゆへり
いつしかも袖うちかけん乙女子(をとめこ)が世なへて
なづりいしのおひさきつれくまでハ毎にてそれ
よりあなるも馬にていそぎつきぬ入(吟ノ)る街とも
よろこびりしこまりきことゆかこと很(うぎり)なしそなるに
ひきてをぐこ四のしておりがうきれ心じくとさふる

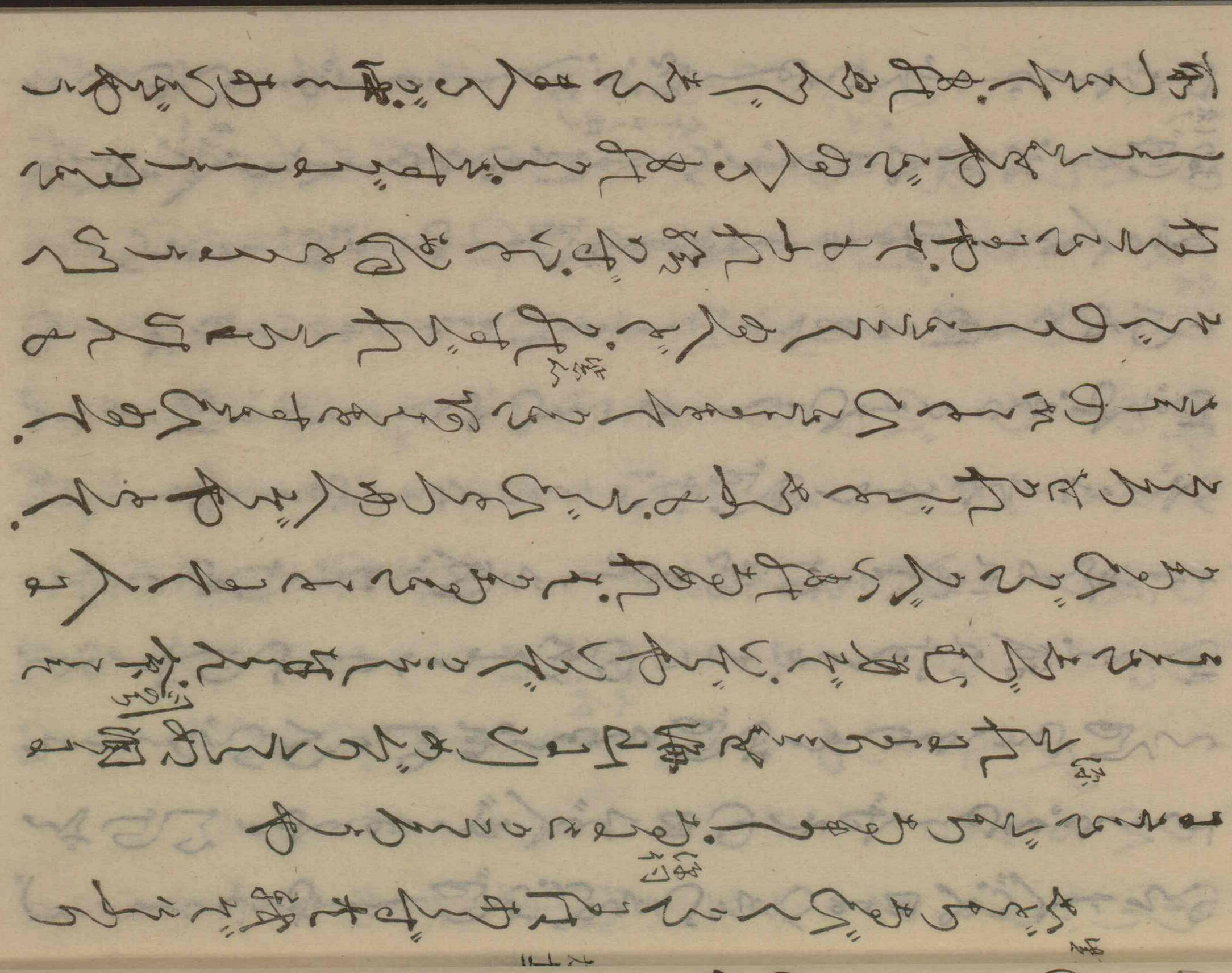
いよくいたましうおそろしきまでさふらごの
いとゆくしきまでうつくしうおもすることたぐひ
なしげ（乳母ハ）よりしたき（ほノ）れ心よりしづききてんと
おぼしたるよむべなりなりとえてまつるよおや
しきたちよいでたちて夏（ゆめ）のこうちしいるなげ
きもさめよなりいやうけうらうたく見えて
あつるひきしゆこもちの君（明石上ハ）も月ごろもれをのこ
ひしづえていとどよもれる心ちよいさたん
とも見えしざりつるをこれ心をきてのすそし地さひ
なぐさめしるくまぞかしらもたげて れつるひよも
よなきさ夜のそろざしをつくせ（徒）とく来りなんと

いそぎくるしがれば。せ(ぬ名)ふことどもしてしきてて
ひ(ぬ名)とりしてあづりは袖の程なきよせふがりの
かげをしぞまつ。と思ひしかり。おや(ほん)しさまでれ心より
くるまゆりしうおぼさる。女(笠)ぎこまはことよあら
りしておさく思ひしかもぬをきくあつを給ことも
こそとおぼして。さこそ(ほ付)おんなれ。おやしう。ひらけ
さるけぎなりや。さもおももなんとせふあるりは
心もとなくて。せひのほうよくちおしくなん。女
まてあなれば。いとこそもれしかれ。ぶ。しうでも
ありぬべきことなれど。さはえせすまじきけぎ
なりかり。よびよやうまてこきくてまつくん。よく三給

なまとまそしぬへば。(笠)おもてうちあかえて。(詞)おやしう
つゆまかやうなるすぢの絵つくる心の程こそ。これ
なぐらうさまし々れ。地よくこはいつなしふべきま
かとゑんじぬへど。(源)いとくくうち思えて。(詞)そよさが
なるいしまりあらん。おもはずまぞこそ絵や。人の
心よりほかなるさひやまごとして。もれ思んじ
などしぬふよ。おもへばかなしとて。たてくは涙
ぐこぬふ。(紫心 又源ノ心也)さしごろあるぞこひしとおもひこそ
絵しは心のうちどもおりくは文のうちひなぞ
おぼしいづるまは。よろづのことすきひりこそ
あれと。さひけれぬふ。(源詞)この人をかうまでさひやま



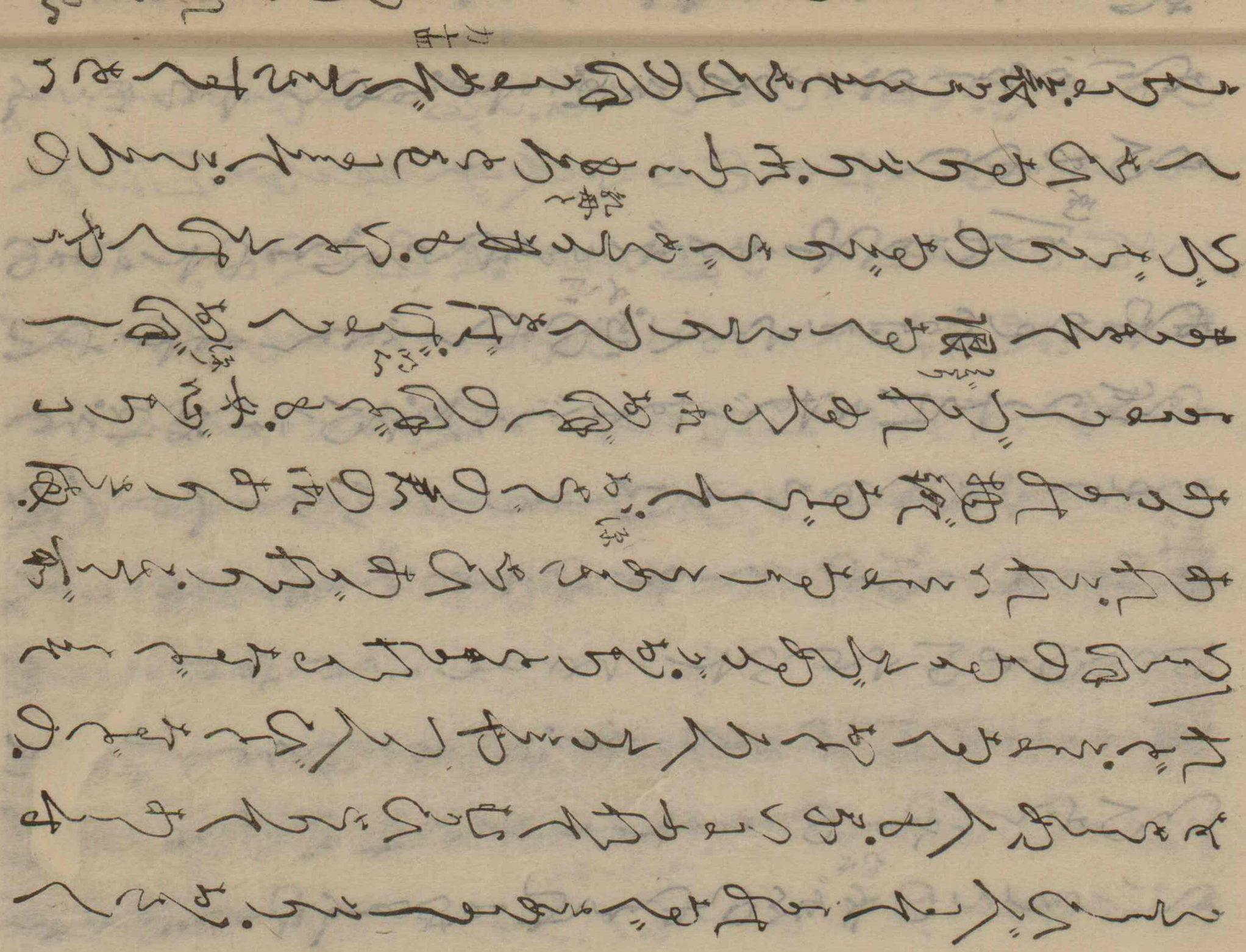
ことゝふは。ゐ紙せやうの侍るぞ。まづ。ゑまゑてしが。
まるひがうろえぬべ。それがとの給。さして人がらの
おりしりしもところゝしゝやめづらしうおぼし
きりしなど。かゝり。四九給。おきれなりしゆゑべの
ゆゑり。いひしことなど。まほなるほど。そのよれ
さちほのこしことの。のちは。めきゝりしも。
すべて心とまれりゝ後。よの給いづるよも。我は又なく
こそゝなりしとせひなげきしが。すきひまても心を
まけ給ひんよと。こゝなしずせひつゞけられて。我も
まれとうちそむきながめて。衣なりしよれ有様
れとひとりごとのやうようちなげきて



むどちあびくりはあらずを我ぞかふり
まさきごちあまりし。おまさかうろうや
これまよりこを海山よりめぐりこゝぬ洞は
うさしづむ身ぞいでやいでかこしなん命こそ
かあひがるかべいもれあれもかあきことまて人は
こころをかれじとしふもこゝひとつゆへぞやとて。
さうのれことひきまをてかきのもをすさひまて。
そゞのしきてゐへどかれすぐれこゝはけんも
ねこきまやでもこれ給ひずいとあはとかまう川く
しうこをやぎぬへるもれからざすがましうねき
取つきて。もれしんじしるまへるが伴くあいぎやう

つきてけらごちなし給を。おりしうをごろありと
おぼ(涼ノ)せ。又月又日まぞ。いかなはあるらんと。人(涼ん)しれず
かぞへぬて。ゆかしう衣におぼしやる。何ごともいかな
かひあるさ夜にもてなしうれしかしまし。口おしの
けぎや。さるところにしもこころぐるしきさ夜にて。
いでさらうよとおぼす。おとこぎをしましかば
かうしも此心にかけ給まじき紙。かうじけるういと
おしう。紙にすくせもこのあとにすつけてず。
かうほなりかりとおぼさるゝ。此川かひいざしき
てらう。かなしぎそのの日こがへぞまかる。川けぬ
のるまへが。又日にいきつきぬ。おぼしやることも。

ありがたうめでたきさ海まで。まめく志きれとふ
らひもあり
（係）うれまろやときぞともなきがほなてなまの
あやめもいかまほくらん。心（文狩）のあくがるくまでなん。
なほかくてはえすぐすまじきを。さひこち語ね。さり
ともうしろめたきことはよもとかいたまへり。入れ
側（れい）のよろこびなきしてねたり。（地）うらなありもい
けかひもいくりいでこうことたりなりとこ也。
寝（略）まもよろげ取きさまで。さひまうけたりされば。此れ
つひなくハやそのよまてこそくれぬべかりされ。
めれともこの女（略）君のあれはなまふやうなりを。

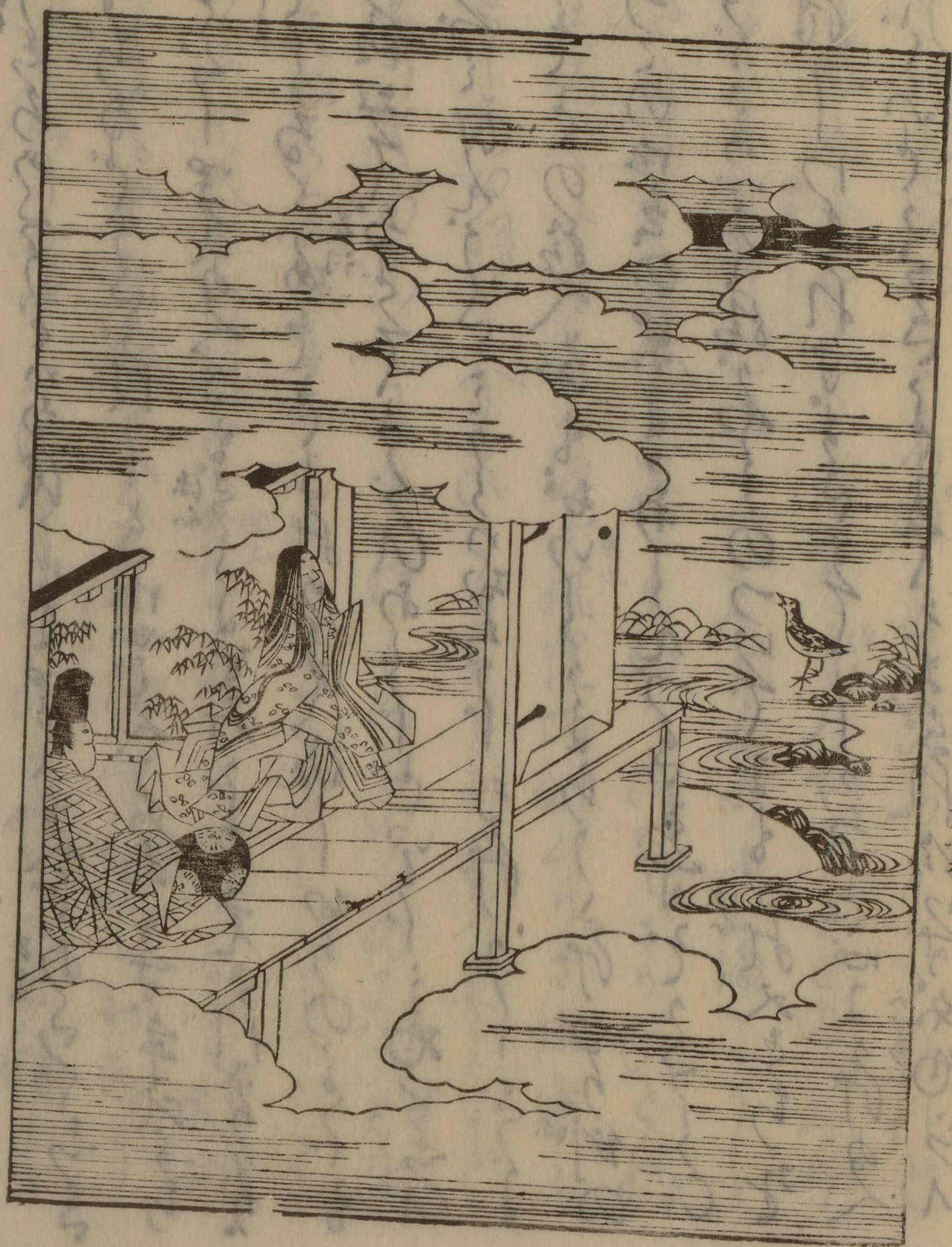


ありけれ。こゝに。ものいは我身はこそありけれと思
つゞけれど。めれとれことはいかりなど。こゝに
まとゝしもをのへるもかくしけなくなるごとも
なぐさめなり。れかへしは
ぬ
かびなるぬこゝ海がくれは鳴(なく)こゑをけふも
いかなとこふ人ぞなさ。よろ(文行)ぶるはなもひこゝへむす
ぼくなくなりさ海をかくこ海さかれれなぐさめる
かけ侍る。いのちのほどもたゝなくなんげるこゝろ
やすくしぬへとくつぎもがれと。まめやかるこゝて
こゝろ。うち(源)かへしこゝ給つ。おれ(詞)れとながやかる
ひとりごち給を。女(紫)ぞ志しりめるこをこゝてこゝろより

そらはさかなのとものびやかなるひとりごち
ちかめかみを。おもしろくまでとりなし給へる
さびしかりのあはれぞや。女のさ度ちかうちかひ
やるとさへく。きしかたのことゝわすれてひとり
ごとゞもうちそへてすゞろに給ふるなど恨みそへ
おそうかへりてこなたゝかうそへてもてなしたる。ま
ちかきのつとゆくへつゝそへてやむごとなき人のかげ
おもと。かくれだにちかなりとおぼえて。ぐくこのわたり
とり給ほどは。なからふ事をうれしうて給ぬるこそを
かくされ。をばやけごともしげく女もさる人は。
あさしるよさへても。めづらしくまれめなど

ろくことのなさ程忘しづめ給なめり。又月夏のつれ
づれなるころ。おほやけ口こうしもれしげりなる
おぼし（源）おこして口（花ちへ）うりぬへり。よそなるがらもあけ
くれるつけてよろづにおぼしやりとふひぬを
このゝまてすぐい給とゝろなれバいまめかしうこ
ころまくさき雨まそぞゝ恨（うゝ）ぬふべきなるしが心
やすげなり。としごろまいまくあれまさりすぞげ
まておかす。（翠案）如此の志る此物紙罪なてまし（花ちへ）のつま
どる事かしてさちよりぬへり。月おぼろり
さしいりて。いとゞえんなる此（源）ふるまひつきもをず
ゝ給。いとゞ（花ちへ）つくましかれどいしちうおまが此給

のうさ夜ちぐしのどやかまて抱し給けらひいと
めやすし。くゐるれいとちうちさうを
（花ちる）くゐちぐるおどろかさずもいかりしてあれ
こうやざる月をいれましいとあれりしういひ
のちゐへるぞ（涼ん）さりぐまますてがこき世かれかく
そ中く身もくるしかれとおぼせて
（涼）をしちべてこしもくゐちるおどろかば
うしのもちうつきもこそいれ



（添付）うちろめたうといふ事なれども。おぼくしつき
すぢなどうるがはしき此心どへまはあらず。年比まち
まぐし事しゆへるも。（添ん）さしまをろかまは見えされざりけり。
そしらなるがめそとこれめ事の給しありのことぐも
の給出て。（花付）などてこぐひあらじといまじう抱をさひ
ちづこけんうきこうらいおなじなげかしさる
こそとの給へ事も。おいらかまらうこげなり。（添）例の
いづこの此云の集まりあらん。つきもずぞうこひ
なぐさめ事し給。かやうのついでまも。（添ん）れ又もちを
おぼしいもれず。まるこそしがなと心まかけゆへ
れどいとうきことまてえまぎれ給ひず。（みせちん）女抱さひ

さしぬを。おやはいろげまさひいふともあれど。
よまへんことをさしてしらう。ろろやすさとのづくり
してそ。かやうのひとつどへてもさふさ海まうし
づきぬふべき人もいでもあれし給いで。さるひとれ
うしろしまもく笑ひ。かれ院の川くりぎ海中に
とどころ御用く今めいたり。よしあるどるやうなど
をえりて。おてくまもかれし給なのしのんの君を。
れえさしたるらきてし給いず。うりずまはしちくへ
ひろろどへもあれど。冬はうしまうりぬて芳の
やうまもあひしくきてし給いず。中に取をう
さりぐしう世中御用さる。院はのどやかまぬし

おりてとさくさつけておもしきれあそびあそび
このましげなりておりしまゝ女御更衣られは乃
ごしきつゝひのへぐ春宮（とうぐう）のはたらく女御（兼香）のうち
ありそしとさきめさ給ことまうくうんのたうことの中（勝）
おぼえなきしけられのへりしたまう。（兼香）ひさうちへ
めでたきれさいたつまそずあれ出そ春宮（春宮）はそひそて
まうりのへるでのおさ（源）だのれとのおぼれ。むりしの
土うげ（桐つぼのみかど）いさちありちしつがに春宮はおもしませば。
ちかどありのはらから。みかどはずどもとて
うまひて。こや（春宮）をも（源）うしろうこ皆り給。（前つぼのみかど）入道さきいの女
れらしるをおしきあかべきあるを。ば。おぼ上天皇に

なずらへて。こゝろ海りしを給。院司（ゆゑづき）どもなりて。さ海
ことまいつらし。れをとなひくぎくのことを。つねまん
れいとなまえてありします。さし（深ん）此世るまちぐりて。
いでいりもりこく。こゝろ（なと）そまつり給ひぬを。いぶきく
おぼしけるは。おぼしさ海まて。氣りまゝで給も。いと
めでこそれば。おぼ（悪ん）ぎこ紀ハ。こゝさまれとよなりなり
と云しなげく。おさ（深）ぐハことまふれて。いとまづし
げまつりまつり。心ことをまゝて給もなりくいと
おしげなりを。人もやすりぎまゝてなり。笑（笑ノ者）アつ
のみこ。さしごろのれ心ぐ人のつくなりもなず。て
こゝよれ罪のしをのこおぼしもぐり給しことを

おとゞいうらみ給よおぼしさまてむしろのやうにも
むつびきこえ給はず。なべての世には何まめくめで
たき御心なれども。このかたは中〳〵なさけなき
もうちまぜ給はせ。入道のひめはいとおしう思ひなき
ことゝきこえまつり給。世中のこと〳〵多かなりけれ
よりて。御はらからおとゞでれおとゞのれまく也。権中
納言の御むすめ。そのとしの八月にまいり給。
御はらからおとゞおもひて。ぞうれしきとおもほしの御
し。冷泉院の中の君もさやうに心ざしてうしづき
給。おほきさき。おとゞいひとりまゐりさへさしも。
御さゞげあんありけり。ぞかし給へらんとまいらん。

その秋をこと古(よし)まおうで給(ぐん)乳どもちくしのべられ
ばいかゞしきれありきまして世中ゆすりて上達ア
あ上ばへ紙もくとつうまつり給ひりしもれ
あ(明歌上ノ事)しの人ぞしごとのれいのことまてつうまつる
をこぞことしさいることありて、をこうけうりして
まりきりうきもてせひたちやり、毎まてまうでこり、
きしまさし門ゆ行(明ノ)れバのこしりて(深ノ)まうで給
ひとのけしひちぎさまこちて、いろくしきりんぶう
らをまてつゞけたりがく人とをづしたまじ、さう
ぞくを調(とくの)へうちをえしひたり、こがまうでのへう
ぞとさふめれバ、内(深)大臣殿の内乳(ぐん)ちくしまうで

ぬを。しらぬ人もあらはりとて。つゝみきほどのぞす
こゝ心ちよげにうちつゝふ。げにあきましう月日も
こそあれ。中にこのありさ風をもうかゝこそて
まつかに。身の程くちおしう。花田。さすがにかけ
もあれこそまつらぬすくをちがしかく口おしさ
きものもれざる。地もひちげまてつゝまつかを。包
かしにおもひたるに。ちるのつゝみきまて。
うろにかけておぼつゝあうしもひきそしつゝかくは
けれひぐさをもしらぐ。こちにつゝんなどもひぐ
くるに。いとうるしうて。ひとしれずしほこれなり。
松原のかゝもぐりなる中に。栄もみぢをこきちし

かくとこゆうくんのこゝろのごとくうすきくずしず。
六位の中にも蔵人(くらうど)はあをき色ありて殊賀(れう)も
のこゞきうしうしなとのかうもゆげいまありて。
まくきげなる随(ずい)ぶしなる蔵人ありてうし
こまよもめでたすけまで人よりよきまれなひなさけ
あさくまでおざろくあさきあたらぬそでくいさゝまのげせ。
もくてうしへびひとくへあまやくまなおやまじとらふん
とりてうちつきころはつやくなる上臈肖ど人の。
紙もくと心いざこ馬くるちどまでぐるりをさくの人こが
こ旅へるいづらしこまれよめ中へも立へり。此車(源ノ)せうる
くまこやれば中こ心やましくそ忘しうれくげせも

えそなしぎ。かつらの（蟲公ノ事）おとゞのれいをまゐびて。ゆらは
ぎいぎんを給ひ給ひ。いとおしげまさぞきこげ
らゆひて。むらさきすそごのまとゆひ為めしう。
さけすぐさとのひうけくしげまて。十人さ為ことる
今めしうこも。おほとれぐらのつ（タハキニ）君がぎりなくりし
づきそく。馬ぞひけらハのほどこれつくりあもきて。
やうくてさうぞきつけたり。雲（ゆん）ゆりゆるめでこく
こゆるまつけても。あぎ君のかずなしぬさ為まて抱しぬふ
といふじとちふぞやさろのうをおがこ男也。（地）くるのうを
まりて。おまうけ。例のたゞなどの来り給ひ。ことる
世まなくつうまつれりけらし。（ゆん）いとりしきまれば

こちまじつとうずなるぬ力のいさしかしとせんに神も
こいれかずまへぬべきまもあらずかへんまもなるぞら
なりかふはなまたるに再さしとめてたらへをぐにせん
とてこぎつたりぬ（涼）さみは夢まもしり給いずよひとこ
色このことをきさせ給ぎまとる神のよろこびのふべ
きことをしつくしてさしかるのれぐるんまもうち
そへおりがたきまであそびのしりあし給雅（これうち）光や
うの人は心のうちに神のれとくを衣にめでたしとせふ
あらさ風に立（涼ノ）出ぬへるにさふらひてたこしいでたり
すえよしのまづしそ地はうちしかれ神よれ
（悟光）
ことにかけてぬまへばげ（涼心）にさぎしぬて

あらかりしなこのまよひは侍者のかこをばか
かそ志やいすりぶるしありなどのかふもいとめで
うしかれあかしの母ごれひごさるをされて。きぬか
こともさゝぬれば。志しぐりけりよし衣は見守。うみ
のれ志るべ見し出りもとろかなるしがいさくかなりれ
きりそこをぐるまして心なぐさめぐや。中くはさふん
りと見守。こやさろうちなて。取くにきうえうをつ
くし語なるものれもしへなどことはなく潮(せ)によそ
をしうつうまつり。ぼりえのいたりをれんじて。いま
りるあるじなるはなりと。れころはもあしでうち
ぎじまへるを。れ車のもしちりきこれころうけ

〽夜なりやしつしん。さかめしまやとれいりか
らひて。かくころまあけろけ。うらじうさかで
あまだ。れらる夜さでもゆらさころあてふそまけれ見。
かしとおぼしてこ。さうげるる
こ浅びらしうかつしまうてまでもめぐり
あひけりえてはかしか。とそのへれだうしこれ
ころしれうもべしりてやりそり。夜あべてうち
すぎ路ても心のこうごくま露ぞうりあられどいと
わられまりしげあくおぼしてうちあすぬ
くずあるぞあまはのこもえひあまるまあで
とどけうしせひそあけん

（四ノ内後ノ多ヌ）
ぬこのこしまゝこそぎつうまつる。ばりしへのまれ
（文を本綿に付たるこ）
まつけてこそまつる。日くれがたるなりゆく。夕塩（しか）こち
こそ。いりえのこぶのこゑあしまぬほどの哀なる
ありかゝなれバこゝや。人（添ん）めもつゝまずあひこまほし
くさへ。ぬぼさる
（四）つゆけさのむかしにたるこびごろもこゝの
（なま）嶋のなまくれず。こちのまくりかひあるさう
こうあそびのこしりぬへど。ば心（添ノ）にはなをかるまて
（四と）ぬぼしやる。（地）おそび（拄女こ）だのつどひまいれるも。上達ゆと
こゝこゆれど。けゝやかることこれましげなるハこれ
ぬさゞめぬべかめり。されどいでやありしこゝとも。

抱の衣もひとがらとそあべかれ。なれめなりことは
ごまずうしあらさきなりぬりハ心とじはる
さりもなき抱をとおぼすまを（拙女ども）のが心をやりて。
よしめきあへるもうとましうおぼ（ほ）しかりかの人（ぬ）ハ
まぐしきそておるの目ぞよろしかりかれバそ
ぐらさてまつり。程なつけたる乳（ぐん）どもなどかつぐ
ちたしけり又（ぬい）中に抱さひそちりてお童くれ
くちおしき身をさひなげくいまや京なおりし
つくんとせふ。目かずもへど（ほより）れつかひありしバこの
ほどまむくんことをぞの給へるいとこれもし
げなかずまへのなかふめれどいさやまるもまこ記

さもあれば中々なる心ぼそさもやあらんと思ひ
まづしみ入ぬるもさそひざりしられんはいとうしろ
めたかりしそくるしうつゝれてすぐさむを物を
ちんも中々さしるのとしじろうかまし。うち
ぱらしあり。ようけなけしあしうぶちがうさ
ことをきゝも。地まことや抜秋家もかきり給ふしのば。
家もなが御の御りかてのちかうしめさ後なるなども
とゝひこさて給ことは、おりがてさまであさけを
つらしのへども。しりしてまつれあまりし此ころ
じんへの中にあらんあまりは、いうじとせひさるち
あまれば、けり給ふるど、すゝまいらせまいらし。おれ

がちまうどくしつて給ても我心なくしもりがたく
とりくづしまむれありさるども取もちあげし
あらさられば志おろさ候ても御尊ず鉄家をぞ
いりまひびあり給ぬんやゆし切ども思召給。
あそそれ(御息所)六条のみつやなさいとうすり一つく
ろひさられば、やびくそてすら給ひりようしつき
あへるともありがたくそうらさ名残(わうだう)など揚くすい
さう人の川どもひ取まで抱さび志さやうなれど心
やれうさ候まで給神まにもくまとまくりづし(御見あん)
あそいまのいつと心ぼそくあげされぞれがつさうさ
取まさしけ入いるもいとどうあげしてもおまゐる姫

なぬおとゞ（源ん）をて語てけぐしきすぢまはあら
ねどなをさりかるのもれとも男あまをぐ人は思
男つりをかくおぼしなりはけりがくちおしう
おぼしなへがおどろきながらつりなへり。おりぼ
あまれなりれとふらひをて語。ちりきれまくら
ぐちまおましよそひて。けりそくはをしうりて。
れ色なぐきそて語。いたうよもりなへるけまひ
なれがこゝぬこゝろざしのほどはえこしなんでやと。
口おしうていとじうない語。かくまでもおぼし
とゞめたりけりを。女もよろづはあれは見えて。
秋宮のれことをぞをそて語。心ぼそくてとまり語

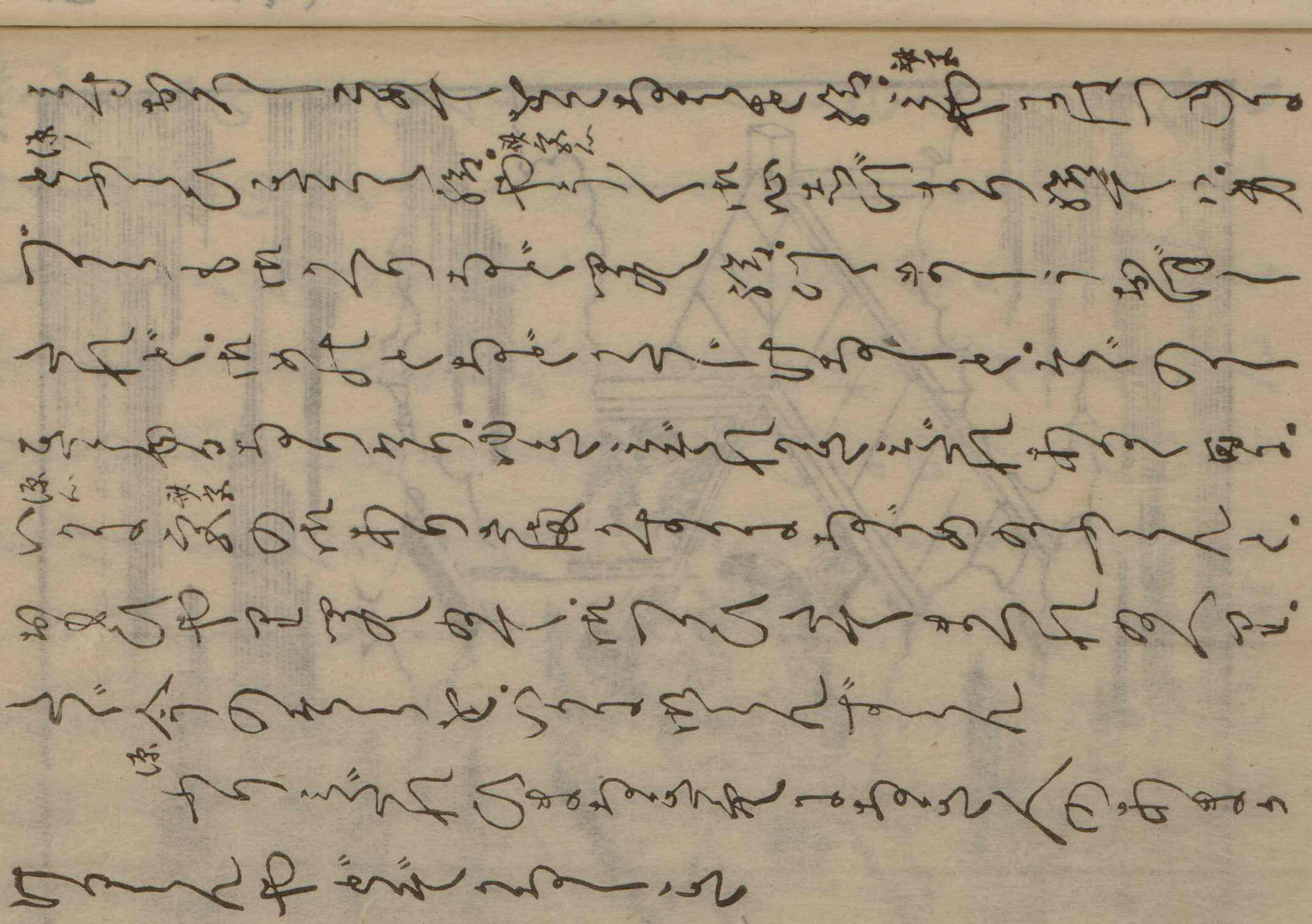
ちんをかなしずことよふれてかずまへこそしのへ
まるこゝゆづる人もなくこゝひなきはありき海に
なんかひなさこれがらも今しがし世中をおもひ
のどむるほどはとき海かうぎ海に地をおぼしもう
まで。こゝそまつらんとこそしたまへつれとても。
きしいりつゝなさ給。かう(源詞)はしとなくてゞる。しひ
もるち四九さすべきにもあらぬを。ましてこゝろの
をよばむ。はしるがひてはなるゞともうしろこゝさて
えんとなんしのふさしようしろめくな世四九し
給そなどこそしのへば。いと(質宗詞)めてきこと海ことより
うちこれむべきあやなどまて。こゆづる人ぞる。兵

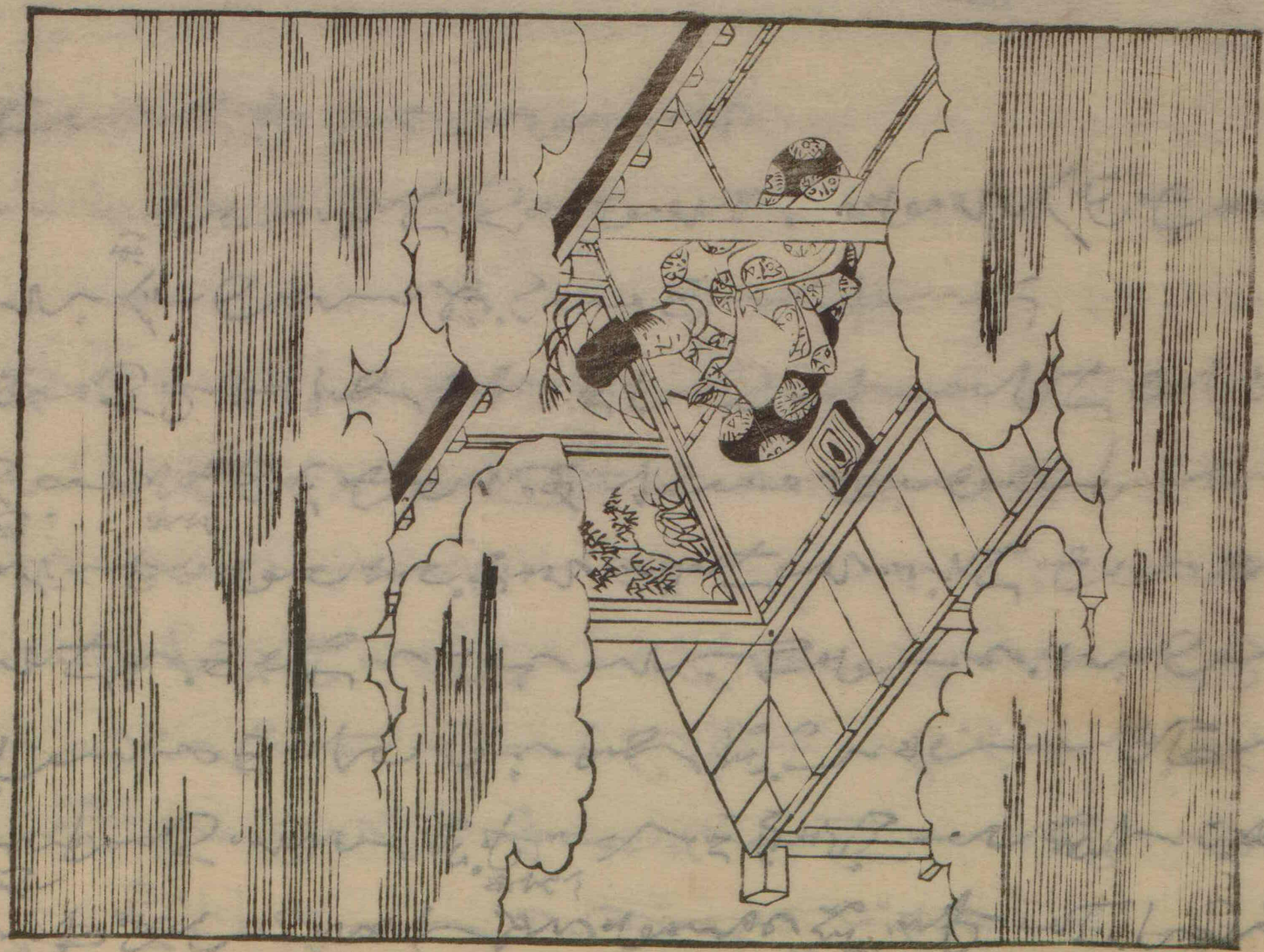
おやはらからもれぬるいとゝ長るゝとゝ伝れ。
まゝてあるはゝ人めうゝむつけてゐけづきるゝ
ゝやうちまづゝ人ゝるゝゝをれゝ長ゝむ。
ゝゝあゝゝひやゝゝゝかれゝゝけてゝやうゝ
ゝびいゝうすゝるあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

といへくうちありうちハ物ほとちまぶらかの乃かり。
まれよりとをりてこゆりをもしもやとぬぼして。
やとられ本丁のほとちびよりこゆへば心もとちさ
程のかうげるれぐ（此息不ノ）しいとおりしげる。菜やうま
そぎてこうねぬへる。思まうさこんさ海して
いこじう衣ちり。丁の東（ひんぐ）ゆりてよぞひかしぬへるぞ
衣（秋衣）ちるんうしれ本性のしどけるくひきやれたる
よりれ先とぐめてこととしこまへれど。いらづえ
つきて。いと地がちしとぬぼいろさ海ちりたい
ちれど。いとうのくしげちんとこゆれぐしの
うるとうほどうしらつきけたひあてちうもれ

給。（源詞）かうれ遣（せんぞん）云のつゝにおぼしけるも。いとゞ哀に
なん。故院（このゐん）のこゝろちあまるもれしゆへど。志る
しくむつびおぼしともおさくなさを。（桐つぼ ノ院 秋家と）うへのおなじ
みこゝちのうちにかずまへ。男に給しかば。さしそこ
このこ男に侍しめ。すくしおとなしき程にあり
ぬるよもひながら。けつふ人もなれば。さうぐ
しきとなど男にて。かゝりぬれ。とふひいま
とこゝろまさりて。志ばく男に給。七八日ありて
（貞不）うを給にそり。（源ん）おしなうおぼさるゝによもいとゝ
なくて。それ心ぼそうおぼされて。内へも寄り給はず。
とくのれことなどをさてさをぬふ。又それもしき

人もことまおしをざりやり。ゆうきさい気(ケウ)のこゝや
づきなど。づうまつりなれたりぞ。こづうまことぐ
もさぶめけり。此(源)力づくしもいたりぬへり。こゝや(秋文)は
此をうそこゝきて給。なまごともおぼし給ひてなど
女別当(ゆうべつたう)してきてぬへり。宇九(源行)さきの給(貞和ノ)をさし
ことぐも給しを。いまは隔(へだて)なきさ夜はおぼされぬ。
うれしくなんときてぬて。人ぐめしいでゝおう
べきことだおほを給。いと此もしげよ。うしげの
此うろだ人。ぞりくへしいべうこゝも。いといかゝん
志う。とのひとぐ(源)なぐもなりいりまいしを
ぬへり。何(源人)もれまうちなりぬいし。此きしじまて。





カ三十

源ノ文
そへ色のこゑのみしらしはきりのみ人かは
けるき人のれめすとぞまりぞりと・こゝろうし
ていくろひさまへるいとめでたもおやなり・こゝやも 訣文ん
いと男しまらて志の人ど・これりれ・へづてそびん
あるきことをあきらあれば・まびはのきこ此はと
きうげしうえんあるま・すこつぎあるぞもうざらりして
訣字
ゑうしげそまかぞりるしきうさくし歌 こゞ
こえれとひらう
男これとも物名ほしぬよまは・いてましげありうき
ざ後まて・いと物ほさくま出てずゞれてかあしる○ど
らうらげまあてもくあるすぢまこ為・ぞぢり給し 源ム 訣亦ろ
ほどもり・ある代あくずな物ばしろしと・いまは心は

かけてともくも四九よりぬべきぞうしと思ほせて
よはれいのひきうへしいとおしくとそこの此
息所のいとうしろめたげにうちをき給しを
とりなれと世中の人もさやうにさひよりぬ
べきことなりをひきこゞへうろぎよそてかつひ
きこしん冷泉うへのいますうし地ほしもりよりひる
なしを給なが内ず訣文此をさせしそまりてさうぐ
しきまうしづきぐうるこそとおぼしなりいと
まめやかにねんごろにきこてのそさうべきおり
おりはつたりなどし給かうし深詞けなくとも芳しん
此なぞりにおぼしなぎしへてけどをうしぎもそ

あはせ給ふはあらん。ほいなかりけるすべくもあらず男し
まへど。げにかく（秋好入）御いそぎをし給も。ふかくまよひたる人
ざ御まて。ほのこともれしおもはずことをさてまつ
らんいひとよるあく絶えづゝかりことしおほし
られば。人ぶくもこゝろしけづゝひてかりの心ざ御をせ（秋好ノ女くう）
（源へ）うれくへ男ておへり。わへこう用待あらざいふ人ぐあき（あう）ふ。
まあるれならぬけりんざとりちゞまて心だちせある
人ご御ほりぬべし。この（源仏）人（秋好を冷泉へまゐらせ給ひし事）きゝれず御もふことのまゞ
らひとも（さ）させさそまつらんよ。人よをとり給まじ
うめり。いぞさやうるれくつらをこそしがれとた
ばさても（地）うちさくべきれおや心ゞにはおしずやあり

りん。けれころもさだめくれども。らくといふ
ことも。人はまよし路すれけぢのれことゝ也。
さりけるぞさらせめ人が。おりぐさされ心を。迷人を
まろしびあへり。むりあく すぐる月日はそへてい
さびしくころばるゝことのこまかなり。
さみか人ぐにもやうしあされゆきちぢして。
こゝろつるのさやうぐしけうりちれば。人げをそく
山ぢの入ねのこゝろぐよそへても。ゆるさがりて
ぞをぐし路。おもじされおやと中にし中にも。
うけ時のまも立ちあれさてまうり路ので。おみうく
さぞまりめて。迷家はもおやをめてくつり路ことに。

例(れい)あまたゝびあるを。おのれがちからにはかなひ難給し
所ろなり。がたりあまちまそいふ。ことひことゝ給
もはらありまし侍。ひるまなりおぼしあげたり。
さふらふ人々はつけて。心うげ思給へさふらひや
あさきもあまたあり。されどおさゞ(涼閔)の。流めし(殊勝)とたら
まゐらるをするしひさいぶし。川まうら
ふおほど。おやうりやのへだし。いとそばしされ
ありさ夜まびんあさましらしめしつけれども
いひゝひつだつあさましのあさけもなまいく
らず。院(朱雀院)なとのれたゞり給し。白犬穢安(ふくゑん)のうち
ありしだしらまゆとらまで見し給し成

うちをつきれがうちおぼし垂(そさ)れば、朱ノ付ありなて
秋院(さいのん)などはいりしのこやくかりしますこぐひ
よて、さふしひなへと、こやまだ家にもこそ給はさ、
されど(ば見示ハ)やむごとなきへごさふしひ給はかずく成(ろう)
はうしろこもなくてやとおぼしつゝそ、うへ(朱雀)は
いとあづしおもしまゐもおそろしうまゐ
抱せやくもへんとのぐりてとぐし給しを、今は
ましてこれは何かうまつらんと人ごせひこうを、
ねんごろに院(朱雀)にはおぼしの給ちをかり、おとゞ(源ハ)さて
なて、院(朱雀)よりはやしきあらんをひきこゞへ、おこゞり
給ちもをかくじけなきことゝ思ひしに、人のはあり

さ夜のいとふけゆけばこゝろきえんはまくらおもしう。入道の宮まで聞えしめけりくのことをもちゐんおまふのへいづふるなくこゝろやすきことさへいとゞもくしくろうかさ夜はあれし侍しをおぼえさあさすき心はまうをそさうまじきちをもおもし。うきあれはおもひとられ侍ましをあん。よるはいとおもふのみぞこれよりそのうらこれころさけどもすぎ侍もしぜいまいとありてのこはこの浜名のれよくとあん。あれきしれしうばさことなくさうごろふはあれこそまじうもいらずはよしとさ聞けめともの宮はも世びぐうあはゆくのかり

つけてごるゝろぐりしきことハ。こゝてまぐされ恐。
けざま侍を。いそぐちまさげまても。波(あの)うらゝけまり
ぎりとしぬふりを。内にもさこそおとちまびさ野
給されど。いとこちまさ此よもひにおりしますを。
もこしもれて心しれり人も。さふらかれてもよく
やとしひのふりを。此さぐめるちんとこそのへだ。
いと(荷羽)ようあばしよりけりを。(糸雀)院にもあばさんことも。
けるかしけちういとおしうるべかれどかれ此(ゆい)遊
云(ごえ)をかとらて。しらずがれる氣しをこそまつり
ぬへし。いまもこさやうのことけざどもあばし
とぐめず。此をこちひがちるちりのそ。かう罪しのを。

かくしも思しとゞめし。ともまゐらず。さしつぐ（源氏）
御気色ありて。かずまへさせ給へど。なほしづかの
ことにそふつまなし侍らん。とく／＼さかり
むかへのすゑにむかへまうでさづりのこゝろ
ばかりへもまゐびたまへ。世の人やいひなさんとてまど
かり給へれなどきこえてのちは。いげはこゝろや
まで。こゝは心しありてんとおぼすも。（二条院一之）（斎宮）女御の君
しつめんせうとくしひゆずらひ給ひんよつと
おほぼどゝありあはひあまんとこそきこえてこそあへど。
（女御）うれしとさとらは思して。御心のうちもせいそぎ
給。へ（秋好）んの文苦ての文のひめごと。（冷泉院）いかし

りづきさはぎ給めるをおさぐのひまある中にて。
いかゞもてなし給はんと。こゝろぐるしくおぼせ。権
中納言の御娘ハこゝ貴の女御とさしも。おぼ貴さん
御こまていとよそほしうまてかしづき給ふ人も
よきれあそびがたきにおぼいたり。宮の中の君も
おなじほどにおもすれバうたてひねなあそびの
心ちすべき紙おとなしきれうしろミハいとうれし
かるべきことにおぼしのまひて。さるれかしきく
こえ給つ。おさぐのよろぶにおぼしいたゞぬと
なく。おぼやけぐさの御うしろミハさらにもいもず。
あけくれよつりて。ゝ阪なる御心ぢんのいと長き

69038
6AP78